

新講

日本史

三訂版

東京教育大学名誉教授

家永三郎

静岡大学

黒羽清隆

共著



三省堂

新講

日本史

〔三訂版〕

東京教育大学名誉教授

家永三郎

静岡大学

黒羽清隆

共著



三省堂

は し が き

この本は、高等学校の生徒諸君が、日本史の全体について、教科書に書かれていることよりも、いっそう深い知識を得ようとする場合に役立つように、ということをおもな目的としている。高校教科書で述べられる日本史の大綱を学ぶだけで満足できない諸君の要求に応じうるようにと考えて書かれているので、おのずから大学の教養課程の学生諸君の日本史に対する知識欲を満たすにも事欠かないと思う。また、受験勉強のことを考えるのは私たちの本意ではないけれど、大学の入学試験にそなえて勉強している高校生諸君が、教科書に書いてあることだけでは、という不安がある場合にも、この本は教科書を補うために役立つであろう。

以上は、この本が主としてどういう人たちのどういう要求を念頭において執筆されたかについて述べたところであるが、著者としては、読者に向かっていったいどういう日本史の学習・研究を期待してこの本を書いたかを明らかにしておかなければならぬ。私たちはすでに数多く市場に出ている学習参考書類に新しい一冊を追加するだけの結果に終わるような本を公刊するつもりは毛頭ないのであって、日本人として祖国の歴史を正しく理解することが、真に国民として祖国と人類の進歩発展に役立つために不可欠の条件であると確信しており、本書はそのような究極目的を旨ざす日本史の学習・研究に役立つことを念願として公刊されたものである。

祖国の誇るべき伝統の正しい理解と同時に、日本の社会の矛盾や過去に犯したあやまちをも冷静にみつめ、今後日本が平和で民主的な精神を堅持して、世界の平和、人類の福祉の向上に寄与できるように努力すること、それが日本人のとるべき態度と思う。そのためには、まず何よりも祖国の歴史に対する科学的な認識と、前述のような目標を達成するために適切な歴史の把握とが要求される。この本は、そのような理念に立脚している点で、類書にない特色をもっていることとひそかに自負する次第である。

本書は、著者ふたりがたまたま多年の交友によって前記のような目標を同じくしていることを確かめ得たので、基本的観点と構成とを相談して決定した上、本文の執筆はすべて黒羽君にお願いすることとした。共著の責任を分担する者として、同君の全力投球の努力に心から感謝をささげたい。

なお、今回、新しい研究成果や最新情勢を加えて、三訂版を刊行することとなった。黒羽君の努力によるものである。また、滋賀県立東大津高校の八耳文之君に多大の協力を仰いだことを付記し、謝意を表する。

1986年4月

凡 例

1. **時代区分** この本では、人類史的・世界史的な視野に立って社会の発展を段階区分するために、いわゆる4段階区分法をとり、〔原始社会・古代社会・封建社会・近代社会〕という構成をとった。また、政権の所在地による区分法である「奈良時代」とか「江戸時代」とかの用語は、適宜に本文のうちに使用した。
2. **年 号** 年号は、原則として、西暦紀元を使用し、できるかぎり日本独自の年号を併記した。また、歴史的人物の下部にある()内の年号では、その人物の生没年を示した。ただし、天皇と皇帝については、とくにその在位年代を示した。なお、生没年において、?を記したのは不明であることを示し、年代をあげて?としたのは、その年代に疑いがあることを示す。
3. **振仮名(ルビ)** ルビは、歴史的な固有名詞を中心として、できるだけ多くつけた。それは、歴史的な固有名詞の読み方がきわめてむずかしいという著者のひごろの認識によるものである。また、ルビを上下につけたのは、読み方に2説があることを示す。
4. **図 表** 図表は、どちらかといえば、やや特殊なものを選んだともみられるであろう。しかし、その場合、「特殊なもの」を通じて「一般的・典型的なもの」に近づいてほしいという配慮をこめて作成・選択したつもりである。
5. **参考文献** この本は、基本的には概説書であるが、ある面では大胆に新説をとり入れ、一般に信じられている常識とは異なる見方をいくつかもりこんでいる。そのような理由もあって、参考文献の明示にはできるだけ心をくばった。
6. **史 料** 史料は、原文尊重の態度によって引用したが、読者が理解しやすいように部分的に修正をほどこした。その修正は、行かえ・送り仮名・振仮名の3点にわたっている。また、漢文の史料は、すべて書き下しの和文に改めた。
7. **外国語** 一般的な外国語は、慣用的な片仮名で表現したが、人名および社会科学の専門用語などについては、原綴(スペリング)を示すようにした。その大部分は、英語であるが、若干のドイツ語・フランス語・ラテン語を含んでいる。
8. **表 現** 表現のうち、その問題に関する専門家の文章あるいは史料をそのまま引用した場合と比喩的な表現をとくに意識的に使用した場合については、その部分を原則として「」でくくった。要するに、一般的な地の文と区別するためである。また、ゴシック文字は、単語のみならず、フレーズ・センテンスにも使用し、読者の理解に便利な形を心がけた。

目	次
第1編 原始社会とその文化	1
第1章 日本における人類と文化の発生	2
旧石器文化 日本人の起源	
第2章 縄文文化と無階級社会	7
縄文文化 社会生活	
第2編 古代国家と古代文化の形成	11
第3章 国家成立期の社会と文化	14
1. 弥生文化の発展	14
大陸文化の波及 農耕文化	
2. 政治的社会の成立	17
共同体の社会 権力者の発生	
3. 小国家の分立と統合	19
小国家の成立 邪馬台国 青銅「武器」文化と銅鐸文化	
4. 大和政権と古墳文化	27
古墳文化の発生 東アジア世界と大和政権 古墳文化の発展 大陸文化の摂取 古墳文化の変化 氏姓制度 屯倉と田荘 民衆生活の歩みと民族宗教	
第4章 律令国家と大陸文化の摂取	45
1. 中央集権への胎動と飛鳥文化	45
中央権力の強化 推古朝の政治 飛鳥文化	
2. 律令国家の形成と白鳳文化	55
大化の改新 朝鮮半島の情勢 壬申の乱と天武政権 律令制の成立 白鳳文化	
3. 平城京と天平文化	79
平城京の成立 奈良朝初期の政治と経済 遣唐使 律令制社会における土地と農民 政治情勢の推移 天平文化 貴族と農民の生活	
4. 律令政治の復興と貞観文化	105
平安遷都 律令制の再興 蝦夷征討 律令制の修正 弘仁・貞観文化	
第5章 貴族社会と貴族文化の成熟	112

目 次 (2)

1. 貴族政治の全盛と藤原文化 112

摂関政治 荘園制の成立 文化の日本化 貴族仏教 神仏の混和 国字の成立
国文学の隆昌 日本化された美術 藤原文化の特質 日常生活 家族生活

2. 貴族政治の衰えと文化の新しい胎動 141

地方政治の混乱 武士の発生 地方の動乱と武士 院政 院政期の文化
武士の勝利 平氏の政権 治承・寿永の内乱

第3編 封建社会と封建文化の発展 163

第6章 封建社会の成長と文化の民衆化 166

1. 公武の勢力交替と鎌倉文化 166

鎌倉幕府 守護と地頭 将軍と御家人 北条氏の台頭 承久の乱 執権政治
貞永式目 公武の争い(荘園制と地頭) 農業生産の発展 商工業の自立
家族生活 鎌倉文化 新仏教の出現 新しい文芸 神道の成立 新しい美術
貴族芸術 武士の文化 蒙古襲来 幕府政治の動揺 鎌倉幕府の滅亡

2. 社会的新陳代謝の進行と室町文化 222

建武の新政 南北朝の内乱 室町幕府 守護大名 応仁・文明の乱
生産力の進歩 商業の発達 倭寇と勘合貿易 貨幣の普及 北山文化
東山文化 新仏教の発展 生活文化の向上

3. 郷村制と大名領国の成立 250

郷村制の成立 下剋上と土一揆 戦国大名

第7章 封建社会の確立と文化の新動向 257

1. 西洋文化との接触 257

ポルトガル人の来航 キリスト教の伝来

2. 国家統一の回復と安土桃山文化 262

織豊政権の成立 封建的農民支配の確立 都市政策の展開
文禄・慶長の役(壬辰・丁酉の倭乱) 安土桃山文化 南蛮文化

第8章 封建社会の固定と庶民文化の発達 280

1. 幕府権力と四民秩序の確立 280

徳川氏の天下 江戸幕府 藩の成立 朝廷・公家・寺社の統制
士・農・工・商 農民政策 家族生活 海外貿易 鎖国 初期の幕政
農業生産力の発達 水産業の発達 手工業の発達 海陸交通の発展
都市の発達 商業の発達 貨幣と信用 町人の社会的勢力

	2. 元禄文化	330
儒学の隆盛 史学と経世論 数学の成立 庶民教育の発達 町人文芸 浄瑠璃とあやつり人形 元禄歌舞伎 美術 宗教 衣食住		
	第9章 封建社会の解体と庶民文化の爛熟	349
	1. 幕政の推移と封建秩序の動揺	349
享保の改革 田沼の政治 寛政の改革 武士の困窮 農村の窮乏 百姓一揆 天保の改革 農民層の分化 新しい生産様式の芽ばえ 雄藩の改革		
	2. 天明・化政期の文化	377
文芸 演劇 美術 教派神道の発生 国学の発達 洋学の発展 近代科学の学 習 開国思想の発生 新しい社会思想の形成 文化の全国的普及 村のくらし		
	3. 開国と西洋文化の積極的摂取の開始	397
西洋近代社会の成立 欧米列国の開国要求 欧米貿易の開始とその影響 幕末における西洋文化の摂取 反幕府勢力の増大(討幕派の成立) 尊王攘夷から開国討幕へ(討幕派の確立) 江戸幕府の滅亡		
	第4編 近代社会の発展	419
	第10章 明治維新と近代西洋文化の摂取	422
	1. 封建制の廃止と近代産業の育成	422
明治維新 明治と東京 藩制の廃止 近代的軍隊の創設 身分秩序の撤廃 士族のゆくえ 開国政策の展開と対アジア外交 士族の反乱 文明開化の風潮 近代精神の芽ばえ		
	2. 富国強兵への道と日本資本主義	439
地租改正 農村の動揺 工業の育成 近代的交通・通信機関の成立 財政政策の展開とその影響 寄生地主制の確立		
	3. 自由民権運動と帝国憲法体制の成立	454
公議尊重と藩閥専制 国会開設のたたかい 自由民権の思想と運動 自由民権運動の激化 内閣制の創始 条約改正をめぐる争い 明治憲法の成立 教育勅語 帝国議會の出発 法典の編纂		
	4. 明治初年の文化	472
学校教育制の成立 新聞・雑誌の発行 近代科学の移植 近代文学の成立 芸術 宗教		
	第11章 資本主義の発達と近代文化の成長	479
	1. 資本主義経済の発達と大陸進出	479

目次(4)

「対外硬」と条約改正 日清戦争 支配体制の変貌(藩閥・官僚・政党)
帝国主義の世界 列国の中国進出と日本 日英同盟と日露戦争
軍国主義の発展 日本の産業革命 交通・通信機関の発達 海外貿易の伸長
金融資本の経済界支配 財政の膨脹 寄生地主制の発展 社会運動の発生

2. 政党政治の発達と資本主義経済の成熟 502

政党政治の発達(大正デモクラシー①) 第一次世界大戦と日本
ロシア革命とベルサイユ体制 軍備の縮小 工業の発展
交通・通信機関の進歩 恐慌と独占の発展 農業・農村の状態 人口の増加
政党政治の展開(大正デモクラシー②) 普通選挙法の成立
社会運動の発展 農民運動の発展 婦人の自覚と解放運動 植民地解放運動

3. 近代文化の成長 523

学校教育の普及 自然科学の進歩 人文科学の発達 近代文学の発達
近代美術の展開 洋楽の開花 演劇と映画の発達 宗教と人生観
日常生活の移り変わり 大衆文化の成立 近代文化と非近代文化の併存

第12章 未曾有の戦争と戦時下の文化 538

1. 中国侵略の開始と思想界・文化界の右傾 538

経済界の不況と中国問題 中国のめざめと日本帝国主義 世界的大恐慌と日本
協調外交の復活 満州事変 独裁主義陣営への参加 日中戦争
軍需工業の発展 戦時体制の確立 思想界・文化界の動向

2. 太平洋戦争とその惨禍 556

第二次世界大戦と日本 日米交渉 太平洋の戦い 戦時体制の強化
国民生活の崩壊 「大東亜共栄圏」の実像 敗戦

第13章 国民主権体制の成立と戦後の文化 573

1. 占領下の改革と文化活動の復活 573

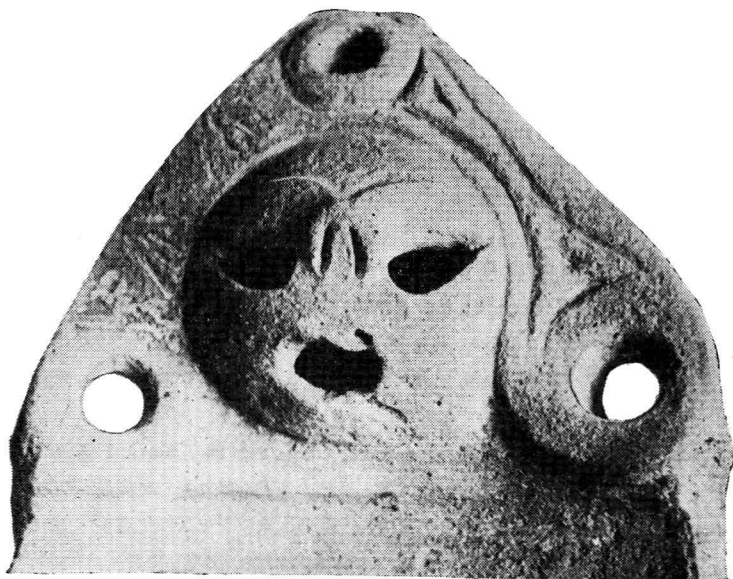
占領政治の開始 政治の改革 日本国憲法の成立 経済構造の改革
宗教・教育政策 戦後の政治と経済 社会運動の復活 国民生活の変容
文化界の再出発

2. 日米関係の成立と経済回復期の文化 583

独占資本の復活 二つの世界の対立 朝鮮戦争と占領政策の推移
サンフランシスコ条約の成立 講和後の政治情勢 平和への努力
国際社会への復帰 技術革新と国民生活 日米新安全保障条約の成立
世界情勢の推移と日本 現代の世界と日本(1) 現代の世界と日本(2)
日本国民の世界史的責務

重要事項索引 600

第 I 編 原始社会とその文化



・歴史をささえる人々！・

縄文式土器につけられた人面。呪術のためのものであろうが、原始社会人の自画像と見ることもできるのではあるまいか。 《山梨県塩山市出土》

第1章 日本における人類と文化の発生

旧石器文化

この日本列島に、いつごろから人間が住みつくようになったかは、まだ正確にはわかっていない。

洪積世

しかし、地質学でいう洪積世^{こうせきせい}には、アジア大陸とどこかでつながっていたこの日本の地に、たしかに人間が生活していたことが知られている。洪積世といえば、今日までのところ、世界最古の人類とされているアフリカの原人たち（オーストラ・ロピテクス＝アフリカヌス, *Australopithecus africanus*, 1924. ジンジャントロプス＝ボイセイ, *Zinjanthropus boisei*, 1959.）の生存していた時期であるばかりではなく、アジア最古の人類である直立猿人（ピテカントロプス＝エレクトゥス, *Pithecanthropus erectus*, 1891.）とそれにつづくペキン原人（シナントロプス＝ペキネンシス, *Sinanthropus pekinensis*, 1927.）のあらわれた時期にもあたっている。したがって、この日本の地にも、直立猿人またはペキン原人のなかがまが生活していた可能性はあるが、それについては証拠は発見されていない。

現生人類

この日本の地に生活していたことが知られる洪積世の人類は、それらの原人たちよりはるかに、およそ数十万年も新しく、ヨーロッパでは、旧人とよばれるネアンデルタール人（*Homo neanderthalensis* 1856, ドイツ）が滅んで現生人類^{げんせいじんるい}のクロマニヨン人（*Cro-magnon* 1868, フランス）が出現するにいたった洪積世の後期・末期に属する人間たちであるらしい。

そのころ、すなわち、およその計算では 25 万年から 1 万年ほど以前になろうか、この日本の地はながい沈降・隆起の運動を繰り返して列島へのみちを歩んでいた。その自然史的歩みのなかでは、大陸の巨象マンモスの化石が本州からは出土しないことにあらわれているように、すでに津軽海峡が出現しており、日本海はかつての湖から海へと変貌しつつあった。これに比べて、本州・四国・九州は陸つづきであり、南アジア系のナウマン象の化石が多いことからみてもいえるように朝鮮海峡・東シナ海・南シナ海のどこかに陸橋があって、アジア大陸とのつながりをたもっていたようである。その間、数万年の長期にわたった二つの氷河期^{ひょうが}（第 3 氷河期・25 万年～15 万年以前。第 4 氷河期・5 万年～1 万年以前）は、この日本の地をもながくとどしていたはずである。そのようななかで、洪積世の人類の群れのいくつかは、歩いて渡れるその陸橋を通してこの日本の地をふんだのであったと推定される。

しかし、日本の歴史の最初の主役であるその人間たちの骨は、まとまった遺骸^{いがい}とし

ては1体も見つかっていない。見つからないどころか、今から40年ほど以前には、学界ですら、沖積世の人類の作りだした縄文文化以前に、この日本の地に人間の文化が存在していたことは、公認されていなかった。

そのことを確かめさせたのは、人骨の発見・発掘ではなく、洪積世の人類の作りだしたとみられる生活の道具＝石器の発見・発掘であった。

すなわち、1946年(昭和21年)群馬県新田郡笠懸村岩宿かさかけむらいわじゆくにおいて、それまで人間生活の遺物・遺跡を含まないとされていた関東ローム層かんとうろーむそう(火山灰性の赤土層)から、黒曜石を欠いて作った石器が発見・発掘されたのを突破口として、その後これまでのあいだに、関東・中央高地を中心に北海道と九州にまでおよぶ約3000以上の遺跡が発見・発掘され、関東ローム層のような洪積世に形成された地層からは人間生活のあとを見つけられないという常識を完全に過去のものとした。

こうして、ヨーロッパ洪積世人類の文化である旧石器文化と同質の文化は、日本においてもその存在を認められたのであった。したがって、新石器文化に属する縄文文化から日本における人間の歴史を語りはじめる学問的常識は、ここに訂正された。

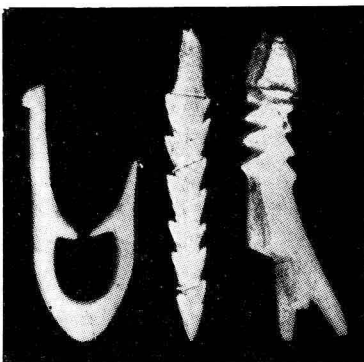
【岩宿遺跡の発見】 1946年、納豆売りの行商をしながら考古学に情熱を燃やしていた青年・相沢忠洋あいざわただひろは、岩宿の村道の切り通しに露出している関東ローム層から、初めて、人間の手によって作られたとみられる黒曜石の石器群と石片とを発見した。この事実、やがて、日本における旧石器文化の存在を追求していた杉原莊介すぎはらしゆうすけ・芹沢長介せりざわちやうすけらの専門家に伝えられ、杉原莊介をリーダーとする明治大学考古学研究室の組織的発掘となり、その結果、1949年には、洪積世人類の生活文化が日本の地に営まれていたことは、疑いのない事実として証明された。その発掘の途中、感激のあまり泣きだした学者があったというエピソードは、この岩宿遺跡の発見・発掘の画期的な意義をよく物語っている(相沢忠洋『岩宿の発見』)。ちなみにいうならば、ひとり相沢忠洋にとどまらず、考古学には、専門家・学者としては低学歴の持ち主でありながら、苦しい独学によってすぐれた研究をなした人びとが多い。

今日まで知られている日本の旧石器文化は、石を石で打ち欠いて作った打製石器うちせつせきを遺物の中心としており、土器をまったく伴っていない。そのため、この文化を先土器文化せんどしきぶんとよぶことが広く行なわれているが、今日では、積極的にすすんで、人類史的な用語である旧石器文化の語をもちいる方がよい。

その打製石器は、大別して、自然の石のまわりを打ち欠いてその核を利用した石器せきと剝離された断片・かけらを利用した石器とがある。それは、一方では、にぎり槌つち(hand-axe)型の鈍器的な道具となり、もう一方では、はぎとり器せきじん(scraper)・石刃せきじん(blade)型の鋭器的な道具となって、獣をとって食べる狩猟しゆりやうの生活を想定させる。おそらく、日本の洪積世人類は、これらの道具を使用して、ナウマン象・トナカイ・オ

オツノシカ・ハナイズミモリウシ(野牛)
*1
をはじめとするけだものたちを追い、かれら
を殺し、その皮をはぎ、肉を切って、暮
らしていたにちがいない。

火の使用はすでに知られており、獣肉を
火であぶって食べることは行なわれたら
しいが、まだ生食の場合が多く、その下
あごと歯は、著しく発達して、強力な咀嚼
力をもっていたと思われる。氷河期の寒冷
のなかで生きるためには、おそらく、全身
に濃い体毛が密生していたであろう。



骨角器

こういう、まだ多分にゴリラ的なおもかげ(?)をのこした人間たちは、岩の洞穴
あるいは巨岩のかげを一時的な住居として、獲物を求めた放浪を行ないつつ、過酷な
自然のなかで戦っていたようである。

細石器

その終末のころには、木・骨・角の軸にうすく鋭い刃をもった細石器(micro blade)
をはめこんだ精巧な手槍・投げ槍が現われ、狩猟技術の飛躍的な前進がみられ、旧石
器文化の最後をかざっている(たとえば八が岳山麓)。

しかし、氷河期が終了に近づき、北海道の地からマンモス象が消えていくところにな
るにつれて、日本の洪積世人類の文化は消えていった。それが新しい文化の発展によ
る古い文化の消滅であるのか、洪積世人類そのものの絶滅であるのか、その結論を出
すことはできない。

日本人の起源

先土器文化を作りだした人間たちの骨は、まとまったかたちでは、
まだ見つかっていない。はやく、1931年(昭和6年)兵庫県明石
市大久保町西八木海岸から発見された人間の腰骨化石は、のち、旧石器文化を作りだ
した洪積世人類のものとなされたが、その化石自体の焼失と周辺の大発掘の失敗によっ
て、一つの謎となってしまった。

明石原人

【明石原人の謎】1931年、そのころは無名の一研究者であった直良信夫は、明石海岸の崩土か
ら化石となった人骨を発見した。その化石を含んでいたと考えられるのは、ナウマン象の化
石をも見つけられたところの洪積世の地層であり、その人骨の形態からいっても旧石器文化
のない手=洪積世人類という可能性が大きかったので、直良信夫はその人骨を東京帝国大

*1 長野県の野尻湖の湖畔からは、1960年代に入って、ナウマン象の骨や歯が大量に発掘され、「旧石器の狩
人たち」の生活があきらかにされた(亀井節夫『日本に象がいたころ』)。

学に送って、鑑定を求めた。

しかし、東京帝国大学をはじめとする学界の大部分は、発見状態の不明確という理由もあって、この人骨の意味を黙殺し、問題の人骨は1945年(昭和20年)の東京大空襲(→p. 562)によって焼失してしまった。

1948年(昭和23年)、人類学の権威である東京大学の長谷部言人は、幸運に保存されていたその人骨の石膏型を調べてその「原始性」に注目し、その化石の主がやや前かがみになって直行していた「原人」であって、現生人類とはちがうことを論証し、これに明石原人(ニッポナントロプス=アカシエンシス, *Nipponanthropus akasiensis*, 1948)という名称を与えた。しかし、そののちに行なわれた明石海岸の大発掘調査は、1個の化石すら発見できず、失敗に終わり、明石原人は永久の謎となってしまった。松本清張の小説『石の骨』は、この直良信夫を主人公のモデルとした物語である。

しかし、明石原人の問題は、日本の洪積世人類の研究にとって、一条の夜明けの光となった。そののち、人類学と考古学の両方から、人骨・人骨化石の保存に適している石炭岩遺跡(石灰岩洞窟)の調査がすすみ、牛川人(愛知県豊橋市牛川町, 上腕骨・女性, 1957年)・三ヶ日人(静岡県引佐郡三ヶ日町, 骨盤・頭骨・四肢骨, 1958年)・浜北人(静岡県浜北市, 頭骨・鎖骨・四肢骨, 1961年)といった化石人骨が発掘された。これらは、出土の地層からいっても、伴って出土した動物化石からいっても、洪積世人類の人骨化石であると認められている(鈴木尚『骨』『日本人の骨』)。

その一方、先土器文化ののちに発達した縄文文化・弥生文化・古墳文化のにない手たちの人類学的研究がすすめられ、その結果、縄文文化人・弥生文化人・古墳文化人の発展は、その間に決定的な人種・種族の交替を伴わない連続的な性格のものである可能性が強くなってきた。そのことによって、明治以後の人類学でいわれていたような〔縄文文化人→北方後退(現アイヌ人)]〔弥生文化人→列島占拠(現日本人)]という人種交替説の立場は、ほとんど弱められ、日本人・日本民族の原型・祖型は、縄文文化の段階で成立していたとみられるようになった。

たとえば、人種・種族の特質を示す頭型(頭骨の長さと同幅の比)についてみれば、今日までのところ、縄文文化人の短頭に近い中頭型から弥生文化人を中間の型として古墳文化人の長頭に近い中頭型へと連続的に変化していった可能性が強く、鼻すじの高さ(鼻骨の隆起度)は、高くて鼻すじの通った縄文文化人から高低混合的な弥生文化人をへて鼻の低い古墳文化人へと連続的に移行していった可能性が強い。身長については、縄文文化人と古墳文化人が近く、弥生文化人が長身であるという事実が部分

*1 関東ローム層をはじめ、旧石器文化の遺物を埋蔵する土壌は、酸性の土壌であるため、骨の消失が促進され、人骨発見の可能性を小さくしている。その点、日本に多い石灰岩洞窟の調査は、まだ本格化して日が浅く、それだけ未来に期待させるものがある。

的に認められるが、それとでも西日本における長身型の異人種の渡来・混血ということ想定させるのみであって、縄文文化と弥生文化のあいだにおける人種・種族の交替には結びつかないようである。

また、言語学的研究によってみても、日本語と親族関係にある可能性がもっとも強いとされる朝鮮語は、少なくとも縄文文化後期の段階では、日本語と分かれていたとされている。つまり、ウラル・アルタイ語系に属する日朝祖語にっちょうそごから、日本語と朝鮮語とが分裂したのは、言語年代学の測定によって、5000年から3500年ほど以前と考えられるのである。もし、この事実が正しいとすれば、縄文文化・弥生文化・古墳文化のあいだには、言語の基本的な一貫性・連続性が存在したことになるのであって、その間に決定的な人種・種族の交替はなかったという考え方に有利である。

しかし、これらのことについては、まだほんとうに確定的な結論は出せない。基本的な一貫性・連続性を認めたとしても、そのなかで起こっている変化をどう説明するかはあきらかでない。混血か、自然淘汰か、栄養状態や気候による変形か、そういう大きな区分ですらまだ成立していない。

したがって、ようやくその人骨化石が見つかりはじめた日本の洪積世人類が縄文文化人・弥生文化人・古墳文化人の系列とつながるのかどうかは、今日までのところ、ほとんど不明であるといっていだらう。

日本の歴史の夜明けは、多くの疑問と謎をはらんでいる。

第2章 縄文文化と無階級社会

沖積世

縄文文化

地球の歴史でくぎるならば、第4氷河期が終わり、洪積世から沖積世への移行が行なわれたのち、この日本の地では、アジア大陸とのつながりは切れ、その周辺を海で囲まれた島国が生まれていた。すなわち、日本列島の誕生である。

ついで、四国と九州が本州からはなれて島となり、気候的には、寒冷から温暖にむかうとともに、かつて支配的だった針葉樹林がしりぞき、新緑・紅葉の広葉樹林が発展し、オオツノシカや野牛に代わってニホンジカ・イノシシの類が出現してきた。

縄文文化

すなわち、沖積世にはいった日本の地は、地形・気候・動植物相のすべてについて、現在の日本列島と基本的にひとしい状態になっていたのである。

この日本列島を土壌として、最初に咲いた文化の「野の花」は、縄文文化であった。縄文文化は、およその計算でいって今から1万年ほど以前に開始され、紀元前(B.C.=Before Christ.) 4~3世紀ごろまで続いた数千年の長期文化であり、ヨーロッパでいう新石器文化の特質である磨製石器をもち、人間が化学変化を生活に応用した最初の記念碑といわれている土器を生みだしており、その点において、先土器文化・旧石器文化から飛躍的に進歩していた。しかも、縄文文化は、南は沖縄本島から北は北海道まで、日本全土に広がる文化であって、その多彩な地方的ヴァリエーションにかかわらず、あきらかな斉一性・統一性をもち、まさに日本民族の文化というにふさわしい本質的一貫性を見せていた。

この文化の名称である「縄文」という語は、この文化の歴史的な新しさと地域的一貫性の代表である土器の形式名であり、むろん、縄目の文様にその特徴を見いだしたことからきたのであって、そのことには深い意味がひそんでいるというべきであろう。

【縄文式土器】 縄文式土器は、特別な窯を造らずに露地で焼かれた素焼きの土器であり、焼成温度が400~600°C程度にしかならないため、黒ずんだ厚手の外形が目だっている。その外観は、極端にいえば一つとして同一の土器を見いだせないほど個別的であるが、同時に、相似性という点では濃厚な傾向をもっていて、初期においては、とがり底・広口の深鉢型をその基本的特徴としている。

このとがり底の深鉢は、その外形の起源は不明だが（巻き上げ式の製法か？かついでの運搬の便か？）その下半部が火に焼けて変色し、ボロボロになっていることからみて、地面に立てて煮沸用にあてることが多かったようである。

もともと、土器というものは、火にあてて熱に耐えられるという点にその最大の特徴をもっていた。単に容器というだけなら、けもの皮革や内臓で作った袋あるいは果実の殻または繊維で編んだ袋・籠のほうがすぐれていたし、早くから知られていたにちがいない。たとえば、水を入れた場合、素焼きの土器は、だいたい一週間で空になるだろうから。だから、火の熱に耐えられるという点こそ、土器以外の道具では果たしえない貴重な役割だった。

こうして、縄文式土器の登場は、草木の根・地下茎・実を煮て食べるという食生活の革命をもたらし、それらの食品を採集する労働の役割をはるかに増大させた。考古学者は、島の縄文文化人について、草の根からとった粉（デンプン）の団子を海鳥の油であげて食べることを推測しているほどである（東京・御蔵島）。

そのうち、縄文式土器は、文様・形態のすべてについて、きわめて多彩な地方的・歴史的な分化をとげていく。すなわち、文様については、粘土ひもの回転文・貝や縄によるスタンプ・ヘラがききといった絵画的なものから、粘土ひものものを付着させた土器面の凹凸による彫刻的なものに移り、たくましく野性的な造型に成功するとともに、深鉢・浅鉢・壺・皿・土びんといった形態の分化が見られてきた。それは、おそらく、煮沸用・供献用（供えもの用）・貯蔵用といった機能の分化を物語るものであろう。みごとな火炎のふちかざりをもつ火炎形土器は、祭祀用の特別な土器であったと想定されている。

打製石器
・磨製石
器

縄文文化においては、縄文式土器ばかりでなく、打製石器・磨製石器があい並んで、めざましい発達・分化をとげた。土掘りに使用されたとみられる打製の石斧は、みがかれて鋭く変化すれば、木材の伐採を可能にしたり、焼きながらくり加工をほどこした丸木舟を造ることもできるようになった。房総半島から発掘された4.8mの丸木舟は、もやい綱を結ぶ穴をもち、櫂を伴っていて、加工具として優秀な磨製石器の存在を証明している。同じことは、小さく鋭い石鏃（やじり）の発達についてもいえるだろう。堅くて鋭い黒曜石は、速力のある、命中率の高い石鏃になるが、そのためには磨製技術の高度な発展が必要だった。

しかも、そのような石鏃は、東北の果てから出土した精巧な木の弓（木の皮や漆でかためた半弓）と結びつけば、けものを狩るにも、水中の魚を射るにも、旧石器とは比較にならない能率をあげたにちがいない（青森県八戸市）。

こうして、新石器文化としての縄文文化は、狩猟・漁撈の経済生活をめざましく発達させ、労働の技術は高度な展開をとげた。日本民族の文化は、農業と牧畜の一步手前まで届いていたのである。

*1 土掘り用の大型打製石斧や炭水化物・デンプンをのこした石皿が見つかったことは、縄文文化における農耕の存在を推進させ、ヒエ・サトイモといった例をあげる学者もいる。しかし、支配的な経済形態は、やはり、狩猟・漁撈・採集であったと思われる。また、縄文文化人の知っていた唯一の家畜は、狩猟用の犬であろう。犬は、今日の柴犬（シバケン）にちかいといわれている。

*2 1978年には、福岡市の板付遺跡で、縄文式土器を包含する地層から、水田遺構と炭化米が出土し、「縄文水田」論が台頭した。「縄文文化」「弥生文化」の時代区分そのものの訂正が問題となりはじめている（『朝日新聞』1978. 8. 7）。

社会生活

堅穴住居

先土器文化人がそうであったように、縄文文化人も群れをなして移動していたにちがいない。したがって、その住居は、はじめは、洞窟・岩かげのような場を求めて作られたキャンプ的なものであったと想像され、徐々に定着性を強めていったと考えられる。いわゆる堅穴住居は、そのような定着性成立の一定の段階を表わすもので、少なくとも一季節の生活基地ではあったとしていだろう。とくに、洞窟・岩かげといった半自然的住居から、堅穴という人工的住居へ移行したことは、文化の飛躍的成長を示している。

堅穴住居は、方形・円形・長円形に掘り下げられた数十センチの穴に柱を掘りたて、木・枝・草で屋根をふいたもので、はじめは^{たてあな}炉は別だったが、のちには、炉を中央にもつようになった。その広さは、[直径 5~6m] [4m×5m] ほどがおよその目安であり、広さや遺骨の発掘例からいって、一堅穴・5名前後とみるべきであろう。ただし、その場合、一堅穴＝一家族とみていかどうかは、きわめて疑わしい。

堅穴は、多くは集まって集落を作っている。その集落は、祭祀場あるいは獲物の分配場のあったらう広場を中心とし、円形ないし馬蹄形のルーズな体形をなして存在している。東京湾を南にもつ一集落遺跡では、南北 100m×東西 30~50m の広さにちらばっている 50 戸の堅穴群が発掘されているが、それは 3 期・300 年の歴史をもったとされているから、50 戸すべてが一時期の集落戸数とは認められない(神奈川県横浜市南堀遺跡)。宮坂英武がその生涯をかけ、ほとんど独力で発掘した八ヶ岳山麓の一集落遺跡からは、70 戸をこえる堅穴群が現われて、東西 200m×南北 100m にわたり展開しているが、一時期の戸数を推定するのはむずかしい(長野県茅野市尖石遺跡)。

これらのことから、きわめてあいまいな見当ではあるが、一堅穴集落の戸数は、数戸ないし十数戸程度と推定しておくのが適切であろう。

【日本の人口】 縄文文化期の日本列島の人口は、どれほどだったろうか？ むろん、国家の成立と不可分であるべき人口統計はない。あるのは、比例式的な推計の方法である。

かつて、日本列島における唯一の少数民族であるアイヌ民族の 18 世紀・蝦夷地(北海道)の人口 2 万 8 千名を基準データとして、日本総人口約 12 万名という推定がなされたが(芹沢長介『日本人の原像』)、いまは、たとえば小山修三氏により、約 26 万名、そのうち、東日本 24 万名、西日本 2 万名というデータがさしだされている。ゆたかな木の実を供給する広葉落葉樹林——クリ・クルミ・ナラ・ブナ——や河川をさかのぼるサケ・マスのみぐみなどの人口支持率の高さがその条件をなす(網野善彦『東と西の語る日本の歴史』。安田喜憲『環境考古学事始』)。私たちの母国の歴史は、ここから出発する。

堅穴住居の集落に住んでいた縄文文化人は、過酷な自然のなかで生きていかなければならず、その平均寿命はせいぜい 20 歳~30 歳ほどであり、その骨には、ときとし